

その
十字路
の先を右に
曲がった。

脚本／北島 淳

原作／Cesare Pavese「La luna e i falò」

チェーザレ・パヴェーゼ「月とかがり火」



とき

現代、またはそれに準ずる時間

ところ

とおくに街を臨む丘、そこに立つ大きな農家

ひと

男

少年または少女（戯曲内では「少年」とする。）

先生

女

子ども1

（ 「男の子」とする。）

子ども2

（ 「女の子」とする。）

※ 男の子と女の子を「子どもたち」とする。

農夫頭

（ 「農夫」とする。）

女中

〔注〕・傍線を引いている部分は、本来発話するべき役のために用意された台詞だが、

他の俳優が盗む部分として指定しているところ。盗む前提で別の役の台詞として記載しているが、上演に当たっては本来の役に戻しても一向に構わない。

・台詞の段組みが二段組み、行頭をずらす等を行っている箇所がある。同時に進行する会話や異なる空間であることを示すなどルールは異なる。

・政治劇として執筆したものであり、劇構造上の利益があると思料したために一部は避けられがちな表現を使用している。

◎ 中央には、机のようでもベッドのようでもある「台」が置いてある
また、舞台上には背の高いものから低いものまで、椅子が方々に配置されている（上演時5脚）

【シーン1】麦打ち場・夜（1日目）／街の遠景・同じ時刻

麦打ち場

台の上では、子どもたち（男の子と女の子）が街の方を眺めている
少し離れて、少年がそれを見守っている

街の方では先生や女が街の遠景（音）をつくっている ※他に俳優があってもかまわない

沈黙

男の子 ……まつり。

女の子 ……おまつり。

男の子 「お」？

女の子 うん。

男の子 何で？

女の子 だって……大きな祭り。

男の子 じゃ、大「おお」祭りじゃん。

女の子 行ったことある？

男の子 ……どこに？

女の子 だから、大「おお」お祭り。

男の子 お祭り。

女の子 うん、お祭り。

男の子 ないよ。……だって、

女 （拍手と笑い声を小さく響かせる）

女の子 あ。

間

女の子 ……今の…何の音？

男の子 知ってる？

女の子 なぁに？

男の子 「音」っていうのは、大きな音だから「お」となんだよ。お祭りといっしょ。

女の子 じゃあ、…大きくない音は？

男の子 ……“と”だよ。

女の子 本当？

男の子 本当だよ。

少年 嘘だよ。

女の子 嘘？

男の子 なぜ分かった？

少年 あれは、爆竹の音。

その十字路の先を右に曲がった。

その十字路の先を右に曲がった。

女の子 爆竹？

男の子 何それ？ ロックバンド？

女 (音を鳴らすのをやめる)

少年 もうすぐ花火がある合図。広場で出戻りの不良どもが鳴らすんだ。

男の子 ……ロックンロールを？

少年 違う。

女の子 あ、来た。

先生 (口笛を吹いて花火らしい音を出す)

子どもたち (口々に感嘆の声をあげる)

男の子は、花火に見とれて思わず台から離れてしまう

少年 ね？

女の子 きれー！

男の子 すげー！

農夫の足音が聞こえる

少年 まずい。

女の子 え？

少年 栗だ！

農夫が麦打ち場に勢いよく乗り込んでくる

すばやく、女の子と少年は寝入ったふりをする

男の子 え？

農夫 (怒鳴る) いつまで起きてるんだ。

男の子 わあ、栗。

農夫 ……なんだ、起きているのはお前だけか？

少年 ぐうぐう。

女の子 すやすや。

男の子 ええ？

農夫 よし、他は寝てるな？

少年 はい、寝てます。

農夫 寝てるやつが返事をするか。

少年 起きたんだよ、あんたがうるさいから。

農夫 起きるな、バカ。

少年 はあ？

男の子 ごめんなさい。

農夫 ベッドに行きなさい。

男の子 ……はい。

少年 あ、ちよっと待って

農夫 いいから子どもはさっさと寝なさい。

その十字路の先を右に曲がった。

農夫は麦打ち場を去る
それを確認した女の子再び街の方を眺めている

男の子 うわ、すっげー怒られた。

少年 子ども？

男の子 (女の子に) ずるっ子め。

女の子 ねえ、

男の子 え？

女の子 サークスとかも来てるのかな？

少年 え、何？

女の子 来てるかな？

男の子 サークス？

女の子 だってお祭りなんだから。

少年 …ああ、来てるよ。

男の子 本当？

女の子 じゃ、ピエロもいるかな？

少年 もちろん。

男の子 じゃ、鹿もいるかな？

少年 どうかな？

女の子 そんなら象さんは？

少年 いるよ、こんな大きいのが。

男の子 そんならトナカイは？

少年 だから、いないんじゃないかな。

男の子 …何で？

女の子 熊さんは？

少年 きつといるよ。

女の子 やった。

男の子 カモシカは？

少年 いないね、サークスに偶蹄目は。

男の子 何で？

女の子 今の何？

男の子 え？

女の子 何か聞こえた……動物の鳴き声？

男 (小さく) がおー。

女の子 象、かな？

男の子 鹿、かな？

女の子 熊さんかも。

男 (小さく) ライオンだよ。

少年 ライオンじゃね？

男の子 ライオン？

女の子 サークスの？

男の子 駄目だよ、ライオンだと鹿が食べられちゃう。

先生

(口笛を吹いて花火らしい音を出す)
(ゆっくりと街の遠景として現れる)

男

(小さく) がおー。

その十字路の先を右に曲がった。

少年 よし、1回鹿から離れてみようか？
男の子 断る。

少年 え、何で？

女の子 ぐるぐるるる……

男の子 え？

女の子 がるるるる……

男の子 ……どした？

少年 さあライオンさん、その鹿を食べちゃいなさい。

男の子 ええ？

女の子 がおー。

男の子 わああ…

女の子 食べちゃうぞー。

女の子が勢いよく、男の子を追いかけてまわす

少年はその様子を見て笑い転げている

男の子 (はしやぎながら) 鹿ジャンプ。鹿ジャンプ。

女の子 痛い。

女の子は飛び上がったときに台の角で足を打ち、そのまま台の上へと倒れこんでしまう

農夫の足音が聞こえている

少年 (するどく) 栗だ！

農夫が再び麦打ち場に乗り込んでくる

女の子は台の上に倒れたままで、少年は寝たふりを始める

事態に気づかない男の子だけがはしやぎ続けている

男の子 鹿キック。鹿キック。カモシカキック…カモシカのような、足。(農夫に気づき) ワオ！

農夫 うるさい。

男の子 はああ、栗い…。

農夫 ベッドに向かいなさい。

男の子 ごめんなさい。(台へと向かう)

農夫 何だ、鹿キックって？

男の子 …鹿のキックだけど興味ある？

農夫 布団をかぶりなさい。

男の子 はい、すいません。

少年 ね、見つかったの？

農夫 だからお前…何が？

男の子 何？

少年 っ…泥棒。

農夫 いや、

少年 来やしないよ。

その十字路の先を右に曲がった。

農夫 え？
少年 泥棒だつて今日はお休みだよ。だつて、お祭りなんだから。
農夫 いいから…もう騒ぐんじゃない。
少年 騒いでないよ、僕は。
農夫 外も消すぞ。いいな？
男の子 はーい。

農夫は麦打ち場を去り、少しして、外の明かりが消える
徐々に街の遠景を担う俳優たちは姿を消している

先生 (最後の口笛を吹く)

男の子 また怒られた。

女の子 いたたたた…

男の子 え、何？

少年 どうかしたの？

女の子 足、うった。

少年 え、いつ？

女の子 さっき、飛び上がったとき。あー…痛い。

男の子 それはね、鹿の呪いですよ。

女の子 …鹿？

少年 あのさ、…どうして鹿が好きなの？

男の子 …鹿？ (突然流暢に) 鹿つてのは農作物を求めて田畑を荒らす害獣ですよ。そんなのが好きだなんてあなた、冗談じゃありませんことよ。

少年 誰だ、お前は？

女の子 ねえねえ、

男の子 泥棒

女の子 つてなあに？

少年 …さあ、なんだろうね。(外出の準備を始める)

男の子 あれ、今日も行くの？

少年 行くよ。どうして？

男の子 また怒られちゃうよ、栗に。

少年 栗は来ないよ。

女の子 どうして？

少年 2回も怒鳴り声を母屋に聞かせたんだ。栗の仕事はそれで終わり。

女の子 どういうこと？

少年 ね、今月のお金、まだ持ってる？

男の子 えー、もうないよ。

少年 うそだ。

男の子 本当だよ。

少年 じゃ、立ってみて。

男の子 何で？

少年 いいから。

女の子 ごめん、足、痛い。

少年 あ、いいよ。ごめん。

その十字路の先を右に曲がった。

男の子 こう？
少年 飛んでみて。
男の子 え？
少年 ジャンプ！
男の子 え、ジャンプ？

男の子が誘われるままにジャンプして台から落ちると、ポケットから小銭の音がする

少年 ほら。

男の子 ……ああ、いや、これは

女の子 お金持ち？

男の子 違うよ。

少年 いくらある？

男の子 少しだよ…150円。

少年 じゃ、これ。(小銭を渡す)

男の子 え？

少年 300円あるから。

男の子 300円？

女の子 いいの？

男の子 でも、

少年 お祭りの日には、大人はみんなお酒とご馳走で騒ぐんだ。って言っても足して450円だから…ジュースとお菓子くらいしか買えないけど。

男の子 やった。

女の子 じゃ、駄菓子を食べたい。

男の子 玉葱さん太郎。

少年 何でもいいよ。

女の子 鉄骨飲料。

少年 まだあるの？

男の子 カルピスを原液で飲みます。

少年 うん、やめときなさい。

男の子 え？

女の子 ありがとう。

少年 そのかわり、栗には内緒。

女の子 分かった。

少年 良い子。

女の子 (喜ぶ)

男の子 よし。じゃ、黙ってやるからあと100円くれや。

少年 (かまわず) 朝には帰ってくるから。

女の子 うん。

男の子 おい。

女の子 (思わず強く) 行ってらっしゃい。

少年 シツ。

女の子 あ……。

あたりに注意を払いながら少年は出て行く
間

男の子 何か……今の、かっこいいな。

女の子 ……何が？

男の子 だから……「おい姉ちゃん、お前金持ってるのかよ？」「はいそこのお兄さん……持ってますー」

「おい姉ちゃん、いくら持ってたんだよ」「はいそこのお兄さん、これだけですー」「おい姉ちゃん、何だ、これだけしか持ってたねーのかよ。仕方ねえ。じゃ、これやるよ」「はいそこの実は良
いお兄さん、どうもありがとうございますー」「……しやらくせえ」……ってことでしょ、今の？

女の子 ……長いよ。

男の子 でも超かっこよくない？

女の子 うん。かっこいい。

男の子 ね、ちよつとやってみない？

女の子 何を？

男の子 逆カツアゲ。

女の子 やりたい。

男の子 じゃ、やろう。

女の子 うん。

男の子 それじゃ、鹿ジャンプからお願いします。

女の子 ……鹿？

男の子 鹿ジャンプ。

女の子 ……って、さっきの

男の子 だから、こうやって、こうやって、（飛び上がる）鹿ジャンプ。

女の子 分かった。

男の子 あ、じゃあこれポッケに。（小銭を渡す）

女の子 うん……（ポケットに入れて鳴らしてみる）よし、大丈夫。

男の子 カモン、鹿ジャンプ。

女の子 ……鹿ジャン……あ、

女の子は台から飛び降りようとする

しかし、足の痛みから転げるように落ちてしまう

男の子 ああ。

女の子 痛い。

男の子は女の子に肩を貸し、2人は麦打ち場を後にする

その十字路の先を右に曲がった。

【シーン2】客間・昼（2日目）／街の路地・夜（1日目）

男が客間の前に現れる

なお、これらはシーン1で少年が去ったときから開始されていてもよい
その場合、冒頭の男の台詞が満足に聞こえないとしても差し支えない

男 あの、ごめんください。本日お約束を頂戴しておりました、スズキと申します。ご主人のお目
通りにならないのですが、よろしゅうございますか？

間

男 誰か…あの、誰か、これいらっしやいませんか？私、怪しいものではございません。農協から
まいりました、スズキスズオと申します。共済の件でお打ち合わせを…ご主人はどちらにあら
ますでしょうか？

間

男 皆さん、作業で出てらっしやるんでしょかね…お忙しいところお騒がせをいたしますが、
私、先ほど申し上げましたように、けして怪しい者ではございません。ですからその…ちよっと、
失礼いたしますよ。

男は客間の中に進み出る

男 失礼いたします。こちらに、ご主人はいらっしやいますでしょうか…と、言いますか、ええ、
どなた様でも結構ですのでいらっしやいませんか？

沈黙

男 ……弱ったな。

男がなす術もなく立ち尽くしているところに、女中が客間を通り過ぎようと現れる

男 （気づき）あ、お邪魔をしております。…私、

女中 （歩きながら会釈をする）

男 いやいや、これはご丁寧にどうも。

男が頭を下げ返している間に、女中は客間を通り過ぎていなくなる

男 ……え？

しばらくすると、女中が戻ってくる

女中は男の姿を認めると、ねぶるように男の観察を始める

その十字路の先を右に曲がった。

その十字路の先を右に曲がった。

男 え……あの、
少年 みゃあお。

一方、街の路地には少年が顔を出す
少年は猫を追いかけて、あたりに注意を払いながら路地をうろつく
さておき、客間では男と女中が引き続き対峙している

少年 ……………みゃあお。

男 あの、これ、私、

女中 どちら様？

男 え？

女中 お客様でいらっしゃいますでしょうか？

男 ……そうですけれど

女中 いらっしゃいます、こんにちわー。

男 何ですか？

少年 ……みゃあお。

女中 いえ、今、お客様と伺いましたものですから。

男 あの、ご主人はいらっしゃいますでしょうか？

女中 独身です。

男 はい？

少年 (ささやくように) みゃあお。

女中 恥ずかしながらこの年まで一人でやってまいりました。しかし、女を捨てた訳ではありません。
男 知りません。

女中 現役です。

男 だから違います。

女中 違います。現役です。

男 ご主人というのは、このお宅のご主人は、少年 (諦めて見つけた椅子に座りこむ)

いらつしやらないかという

女中 ああ、ああ、だんな様でございますね…おりません。

男 え？

女中 お出かけになっておいでです。

男 あの、私、ご主人と本日、

女中 独身です。

男 ですから、そのだんな様と、お約束をいただいておりますスズキと申します。

女中 スズキさん。

少年 誰？

男 はい、スズキです。

女中 スズキさん。

男 そう。農協から参りました、スズキと申します。

女中 農協の、スズキさん。先生 (傘を差したまま姿を現す)

男 はい、農協のスズキです。

女中 いらつしやいませ、こんにちわー。

男 あの、共済の件で、だんな様のお目通り 先生 何してるの？

にかないたいのですが、

女中 確かにだんな様はたいそうな恐妻家でございます。

男 はい？

少年 別に何もしてないけど。

その十字路の先を右に曲がった。

女中 けれど家の者しか知らない秘密を、どう
先生 ……そう。
少年 うん。

男 農協の、スズキです。

女中 どっちでもいいです、そんなこと。

男 よくありません。

女中 じゃあそっちでいいです。

男 あの、お話を続けても差し支えはありませんでしょうか？

女中 はい、喜んで！。

男 つまり、私はご主人が

女中 恐妻家だ

男 とか申している訳ではなく共済。つまり、

先生 じゃ、何してたの？

女中 ……保険？

男 ええ、先日連絡をいただいたのですが、盗難の被害についてお調べしたいのです。つきまして

は、まずは加入者であるご主人、ああいやいや、どんな様にお会いしたいのですが。

女中 承知いたしました。どんな様一丁ですね。少々お待ちくださいませ！。

女中はそのまま客間を去る

男 え？ ……あの、ご主人って今、出て
少年 なあに？

いらつしやるんですよね？ ……だったら、
先生 だつてさつき、

あなたはいったい何を一丁持つてこよう
少年 何してるの？

としてるんです？ ……あの、ちょっと
先生 って聞いたら、

戻ってきていただけませんか？あなたが
少年 別に何もしてない

いなければ私、こんなところにひとり
先生 って君は答えた…だから

……何をどうすれば良いんですか？
少年 何してたの？

先生 って、もう一度聞きなおした。

少年 ……さつきから何言ってるの？

先生 何も、して

男 (地団駄を踏みながら) アイ・ドント。
先生 こなかつたなんてあるはずないんだよ。

ライク・今の人。
先生 生きている限り。

間

路地の会話は続いている

一方、客間にひとり取り残された男は失望から座り込み、いつしか居眠りをしてしまう

少年 猫。
先生 ……え、何？
少年 猫が、いなくなつて。
先生 ……飼つてるの？
少年 そういう訳じゃないけど。
先生 どうする？
少年 え？
先生 どっか行こうか？
少年 ……いいよ、お金ないし。
先生 いいよ、出すけど。
少年 朝から作業もあるし。
先生 あ、そりや大変だ？
少年 刈り入れ、近くて…。ほら、こないだ少し駄目にしちゃったから。
先生 お祭りには行つてる？
少年 ……え？
先生 だから、
少年 お祭り……今、来てるよ。
先生 怖いの？
少年 どういう意味？
先生 あのさ、
少年 雨。
先生 ……何？
少年 とつくにやんでるんだけど。
先生 うん。
少年 何で傘さしてんの？
先生 ……（傘に気づく）おお。
少年 行かないの？
先生 え、何？
少年 お祭り、行かないの？
先生 ……来てるよ。
少年 怖いの？
先生 ……別に。
少年 うん。
先生 それじゃ。
少年 ……うん。

先生はそのまま路地を去る

その十字路の先を右に曲がった。

【シーン4】客間・引き続き屋（2日目）

子どもたちが歌いながら客間への通路を歩いてくる
女の子は少し足を引きずりながら、次第に男の子から遅れだす

女の子 ねえ、ちよつと速い。

男の子（かまわず歌いながら客間へと入る） …あれ？

男の子は男に気づき、客間に入ったところで立ち止まる

男 ……え？（起きる）

女の子 どうかしたの？

男 …あの

男の子 誰だ、お前？

男 え？

女の子（男の子に追いつき、男の姿を認め） あれ？

男 ああ、これはどうも。

男の子 知ってる人？

女の子 知らない人。

男の子 じゃあ誰だお前？

男 君たちは、この家の子ども？

女の子 そうだよ。

男の子 質問に質問で返すなんて、なんかコンパみたいですね。

男 え？

女の子 コンパって何？

男の子 ーとね、パンコの逆だね。

男 あの、いいかな？

男の子 何が？

男 お父さんは、いらっしやるかな？

女の子 …お父さん？

男の子 誰の？

男 いや、君たちの

女の子 お父さん？

男の子 いないよ。

男 あ、そうか。じゃ、お母さんはいらっしやるかな？

女の子 お母さん？

男の子 誰の？

男 いや、だから、君たちの

女の子 お母さん？

男の子 いないよ。

男 誰か、家の方はいらっしやらないかな？

男の子 ー、それはちよつと教えられないかなあ。

男 どうして？

その十字路の先を右に曲がった。

その十字路の先を右に曲がった。

男の子 ほら、

女の子 あやしい人は家に入れちゃいけない

男の子 って言われてるしー。

男 いや、でも現にもう入っちゃってるからね、ほら。

男の子 それは勝手に入ってるだけだしー。

男 (怪しい動きをしながら) そもそも、ぜんぜん怪しくなんかないからね、ほらあ。

男の子 いやいや、ぜんぜん怪しいし。

女の子 うんうん、怪しいし。

男 ああ、じゃあ、どうやったら信じてもらえるかな？

男の子 100円くれる？

男 ……100円？

男の子 うん。

女の子 え、100円ってちよつと高くない？

男の子 高くないよ。昭和初期の大卒初任給だよ。

女の子 それ、高いよ。

男 (財布を出して) よし、買った。

男の子 マジで？

女の子 いいの？

男 結構だ。

男の子 やった。

男 いいか、君たちも覚えておくと良い。人生に100の困難があれば、そのうち98のことは金でどうにでもなる。あとの2つは、愛嬌だ。

男の子 箴言、ありがとうございます。

女の子 今後もご指導、ご鞭撻を。

男 うむ、活躍を祈る。

男の背後には、いつの間にか女が出てきている

女 あら、どなた？

男 え？…あの、

女 あなたたち、お友達って感じでも…まあ何だか仲はよさそうですね、

男 (子どもたちに) あの、お母さんじゃ？

男の子 違うよ。

女の子 だから、お母さんいないって。

女 あの、失礼ですが、あなたは？

男 失礼。私、農協から参りましたスズキと申しまして、

女 まあ、わざわざ農協から？

男 先ほど、ご主人は留守と伺ったのですが？

女 ええ、あいにく出ておりました。

男 なるほど。ではいつ頃お戻りになる予定 男の子 100円は？

女 なんででしょうか？

女 よく分かりませんが…でも、そんなに長いこと家を空けるってことも無いと思うんです。もうすぐ刈り入れだって始まりますし。

その十字路の先を右に曲がった。

男　　そうでしたか。(財布をしまう)
女　　それで、お宅様は？
男　　そうでした。私、農協のスズキスズオと申します。本日は共済の関係で、
女　　はい、ストップ。
男　　……え？
女　　何ですって？
男　　……ええ、共済と申しますのは、簡単に言うと、私ども農協が取り扱っている保険のことです。
女　　はい、もう一回ストップ。
男　　……何です？
女　　違います。
男　　え？
女　　あなたは……スズキさんでいらっしゃるんですよね？
男　　ええ。
女　　なのに……スズオさんでいらっしゃるんですか？
男　　そうです。
女　　おふざけになってるんですしたら承知できませんよ。
男　　何ですって？
男の子　　お前、さすがにスズオさんはねえだろ？
男　　いやいや、だってこれ、本名ですから。
女の子　　じゃ、そもそもスズキさんじゃなかったり？
男　　ですからスズキさんです。そっちも本名です。
女　　あの、立ち入ったようなことを聞くようですけど、
男　　は？
女の子　　生まれてからこれまでに、何らかの事情で苗字が変わったなんてことは？
男　　ありません。
女　　どういうセンスでつけたんです、そんな名前？
男　　親に聞いてください。
女の子　　じゃあ親をつれてきてください。
男　　いや、親はもう死んでいませんから。
男の子　　聞けないじゃん。
男　　ともかく事実として、私はスズキ・スズオなんです。先祖代々受け継いだスズキという苗字に、
女の子　　親から貰ったスズオという名前を足して、
男　　何か、この人かわいそう。
男　　……何が？
男の子　　何て読むのか分からないくらいキラつくのもどうかと思うけどね。
女の子　　逆に無関心、っていうのもちよっとね。
男　　いや、あのね、
女　　あなたは、本当に望まれてこの世界に生まれて来たんでしょうか？
男　　どういう意味です？
男の子　　強く生きろよ。
男　　え？
女の子　　くじけちゃ駄目だよ。

女の子　　……あ。

その十字路の先を右に曲がった。

男 はい？

女 さ、明日に向かってお帰りでしたらあちらです。どうぞ。

男 あの、さつきから私のこと全然信じていただけませんかよね？

女 だって、別に何だって構いませんのよ、お名前なんて。

男 …え？

女 そりゃ、ちよつと珍妙なお名前でしたからびっくりはしましたし、そのお名前を信じたという

男 訳でもありませんけれど、

男 いや、あの

女 ただ私には保険なんて難しいことは分かりませんし、あなただって、そんな難しいお話を差し上げたのは私や子どもたちじゃなくて、夫のほうなんでしょう？

男 え？

女 …え？

男 …夫？

女 ええ。

男 あなたの？

女 ええ。

男 でも…（女の子を指して）さつき

女の子 お母さんはいないよ

男 つて、そう。

女 だって、その子たちは私たちの子どもじゃありませんから。

男 …え？

男の子 お父さんもいないよ。

女 私たち、身寄りのない子どもを引き取ってて…その2人だって、別に兄妹ってこともありやしないんです。

農夫が家の外から子どもたちを呼ぶ

農夫 おい、いたのか？

女の子 あ、ヤバイ。

男の子 栗…

農夫 そっちにはいたのか？

女の子（外に）いないよ。…（ドアから外に顔を

出して）麦打ち場も探したけどいなかった。

男の子 あの、すみません

女 構いませんよ。

女の子 はーい。

男の子 ごめんなさい。じゃ、これで。

女 ええ。

子どもたちは、農夫の指示に従ってバラバラに去る

女 保険の話、でしたかしら？

男 あの、今の子どもたちは、

その十字路の先を右に曲がった。

女 いえ、別にあの子たちが特別何だってことはないんです。私たち農業なんてやっていますと、
男 どうしても人手だっていりますから、そういうことも含めて、元より子どもを引き取ったりつて
女 ことはあつたんです。それに、
男 そうですか。
女 ……はい。
男 あの、私、共済の関係でお伺いを差し上げたんですが、
女 聞きましたよ。私もそう申し上げましたし。
男 何か、ご主人からお聞きになっちゃいませんか？
女 いえ、残念ながら。
男 そうでしたか。
女 あなた、どうなさるんです？
男 え？
女 このまま、主人をお待ちになりますか。じきに帰ってくるかもしれませんし、
男 ええ、そうさせていたきたいのは山々なんです、
女 ええ。
男 私、バスで戻らなければならないんです。
女 バス？
男 ええ。ですから、あまり長居をする訳にはいなくなつて、
女 ありませんよ。
男 ……何がです？
女 バス。
男 え？
女 お祭り、ここに来る途中でご覧になりました？
男 祭り？
女 お祭りの間は、日が暮れると規制が敷かれて、車はすっかり動かなくなつて…今から歩いて、
男 街につくころにはすっかり日暮れですし…。
女 ええ？
男 やつぱり、こちらでお待ちになつたらいかがですか？
女 どうして？
男 だって、あなたは主人にご用がおりなんですし、どれにせよ、あなた帰れやしないんですし、
女 もし、主人が戻らなくなつても、そのときはお泊まりいただくこともできますし…。
男 帰らないことがあるんですか？
女 ですから、万が一ですよ。さつき申し上げたように
男 お祭りが来ている、
女 車も止まってしまうんですから、帰つて来れないことだつてあるかもしれません。
男 しかし、よろしいですか？
女 何が？
男 私…泊めていただいても？
女 結構ですよ。
男 では…電話を、お借りしてもよろしいでしょうか？
女 ええ。こちらへどうぞ。

女は男を連れて母屋へと向かう

少年はコートを手にして帰路についている
農夫がそれを見咎め、少年の前に立ちふさがる

農夫 どこへ行っていた。
少年 …別にサボってないし。
農夫 だから聞いている。
少年 え？
農夫 どこだ？
少年 …牧場だよ。
農夫 畜舎の整理はしたのか？
少年 やったよ。
農夫 小屋の掃除は？
少年 やったよ。
農夫 飼料は？
少年 やったよ。
農夫 水は変えたのか？
少年 （激しく）全部やったよ、あんたが知ってることは全部。
農夫 羊を放せとは言っていない。
少年 出さなきゃ草が伸びすぎる。
農夫 放牧にはどんな様の確認がいるんだ。
少年 こないだもそんなこと言ってる間に畑に霜を降ろした。
農夫 この時期に霜が降りるなんてこと誰もわからない。
少年 ラジオで言ってたよ。前の日には雨も降ったし風も止まった。
農夫 …お前、いつラジオを聴いてるんだ？
少年 今、そんなこと話してない。
農夫 勝手をするんじゃない。
少年 勝手ってどっち？
農夫 …あ？
少年 ラジオのこと…それとも羊？
農夫 俺は手続きのことを言ってるんだ。とにかく勝手をするんじゃない
少年 だからそれはどっち
農夫 （さえぎるように）うるさい。

農夫はそのまま去ってしまう

沈黙

少年はコートを地面に叩きつけて去っていく

【シーン6】麦打ち場・夜（2日目）

麦打ち場だが、冒頭のような街の遠景は現れない
男の子が祭りの様子を眺めているところに先生が現れる

男の子 あれ？

先生 どうした？

男の子 シツ。

男の子は聞き耳を立てて祭りの音を聞いている

先生 聞こえる？

男の子 少しだけね…今日は花火は上がらないの？

先生 毎日は無理だね。

男の子（小さく、しかし遠くに）花火

先生 っていうのは、花火をあげるための人だっているんだから、今日はその人の休み。

男の子 へー、知らなかった。

先生 あら、残念？

男の子 ううん、楽しい。

先生 ……何で？

男の子 街が騒いでるのがよく分かる。昨日より人がたくさん出てる。

先生 行ってみたい？

男の子 え？

先生 お祭り。

男の子 ……祭り。

風呂上がりらしい様子の男が不満気に入ってくる

男 まったく、お祭りっていうのは一体いつまで続くんです？

男の子 あ、スズキが帰って来た。

男 どうも。結構なお湯でございました。

先生 広いでしょう、ここのお風呂。

男 あ、これはどうも。

先生 大変ですね、泊まりがけで。

男 いえ、仕事ですから。というか、別に泊まっているのは帰れなかっただけですからね、お祭りのせいで。あれ、もうひとりは何？

男の子 足の治療中。

男 え？

先生 どうぞ、適当に椅子でも出してお掛けください。

男 ああ、これはどうも。先生もどうです、お湯、いただかれては？

先生 いや、僕は遠慮しておきます。

男 先生こそ大変でしょう。こんなところまでわざわざ。

先生 ただのバイトですよ。

その十字路の先を右に曲がった。

男の子 市の仕事だから給料も良いしね。

男 あ、家庭教師じゃないんですか？

先生 まあ家庭教師なんですけど……ほら、学校がなくなっちゃったじゃないですか、ここ。だから、僕みたいなのが派遣されるんです。

男 えーと、大学生？

先生 院生です。

男 じゃ、普段は研究とか？

先生 あ、興味あります？

男 いや、まったく。

先生 実はですね、まったく新しいエコ技術、

男の子 長いよ。

男 というのを研究してまして。

男 エコ？

先生 人が怒ると、電気が出るんです。

男 ……元気が出るんですか？

先生 いや、電気が。

男 ああ、電気が。

先生 あ、興味出てきました？

男 ええ、まあ少しだけ？

先生 怒って他人をどやしつけることを「雷を落とす」って言うじゃないですか？

男 ええ。

先生 つまり、人は電気を作ることができるんです、怒ることです。

男 ……え？

先生 分かりませんか？

男 ええ、さっぱり。

先生 雷っていうのは、電気でできています。これはご存知ですね？

男 知っています。

先生 人間はね、今はまだ作った電気を人へと向ける、つまり「雷を落とす」ということでしかその怒りを放電する術を持ちません。そこで僕は今、これを交流の電気に変換するためのインバーターを開発しています。

先生 確認ですけど、先生、今は哲学の話をされていますか？

男 いいえ、物理学の話をしています。

先生 なるほど、物理学。

先生 ほら、四六時中怒鳴ってるおっさんとかって、そこらへんにいっぱいいるじゃないですか？

男 そういうおっさんにインバーターを装着させて、今、官民で総力を挙げて開発を進めている電力グリッドに組み込んでしまうんです。

男の子 言ってる意味分かる？

男 さっぱり分かん。

先生 つまり簡単に言うと、隣のおっさんが怒る度に我が家の電気が点くんです。その手のおっさんってのは大体ずっと怒っていますから資源は無尽蔵だ。何より、近所のちよつと迷惑なおっさんが人の役に立ってしまふんです。これは隣近所の大切さを再確認するとともに、コミュニティの絆を取り戻し、ひいては地域全体の安心と安全につながるという大発明ですよ。

男 なるほど。先生の大学は早稲田の隣の方にあるのかな。

先生 いいえ、違いますけど。

その十字路の先を右に曲がった。

男 大丈夫？ 変なことばかり教えられてない？
男の子 あ、それは大丈夫。
先生 ええ、そもそも普段はほとんど何も教えてませんから。
男 それは良かった。何よりです。
先生 お仕事は済んだんですか？
男 いや、そこなんですよ。
先生 ええ。
男 仕事も何もちつとも進みやしないんです。だって、肝心のご主人が一向に帰ってこないんですから、この家に。
先生 あれ、奥さんじゃダメなんですか？
男 ええ、やむを得ない場合には配偶者でも構わないんです。でもあの方、自分じゃ分からないからってばかりで、少しも話を聞いちゃくれないんです。
先生 ああ、なるほど。
男の子 (足を引きずりながら帰ってくる) ただいまー。
先生 ああ、先生が来てる。
女の子 と、何だっけ？
先生 やあ、どうも。
男 と、何だっけ？
男 スズキです。
男の子 どうだった？
女の子 湿布してもらった。ほら。
先生 あ、そうだ。栗のおじさんは？
男 何です？
先生 会いませんでした、農夫頭の？
男 ああ、あの方が何か？
先生 農場の責任者ですよ。どんな様がない留守を預かっている
男 あ、と、ここであの方はどうして栗って呼ばれてるんでしょうか？
男の子 え、だって栗っぽいじゃん。
女の子 ってゆーか、栗そのまんまじゃん。
先生 はい、そういうことで。
男 じゃあ、その栗さんならお分かりになりますかね？
先生 保険の話？
女の子 それは無理じゃない？
男 え？
男の子 うん。栗は基本的に頭悪いから。
男 基本的に？
女の子 すぐ怒るし。
男の子 口下手のくせに説明しないし。
先生 そう言えば、大体怒鳴ってるよね？
男 最悪じゃないですか。
男の子 うん。
先生 あ、でも発電には使えるかも。
男の子 あれ、何で一人なの？

男 え、使うんですか？

先生 サンプルはいつでも貴重ですから。

男 あの、先生のお力で奥さんと保険の話は
できませんかね？

先生 いや、そんなこと言われなくても。
別に難しい話じゃないんです。今回の盗難事件について、ちよつとお話が伺えればそれで結構
なんですから。

先生 え、盗難ですか？

男の子 あ、何かそういうこと言ってたね。

男 え？

男の子 何だっけ？

女の子 えーとね：泥棒？

男の子 あ、そうだ。

先生 泥棒？

女の子 うん。

男の子 栗、たぶん今も見回りしてるんじゃないかな？

男 君たち、詳しいこととか知らないかな？

女の子 ううん、知らない。

男 あ、そう。

先生 なるほど。そういう風に調査をしていくのがお仕事なんですな。

男 ええ、まあ簡単に言うよ。

男の子 (先生のまねをしながら) なるほど。お前、簡単なヤツだな。

男 そういったものを丹念にひとつひとつ調べ上げてですね。

先生 ええ。

男の子 おい、無視すんな。

男 例えば、盗難される際に管理にまづいところはなかったか、とか。

先生 ははあ。

男の子 だから、無視すんなって。

男 他には、盗まれた時点でその財産はどれくらいの価値があつたと推測されるのか、とか。
なるほど。

男の子 もしもーし。

先生 あ、もちろん身内に犯人がいたときなんかは一切補償できませんからね。

男の子 はい、ちゅーもーく。

先生 そうか、そういう場合もあるんですね。

男の子 どしたの？

男の子 はい、あなたはムシから生まれたムシ太
郎さんですか？それとも、ムシを助けてム
シ宮城に行けちやう浦ムシ太郎さんでしょ
うか？

先生 つまり、スズキさんは保険金を支払える
かどうかの調査に來られた、と、そういう
ことですよね？

男 ええ、何しろ私、いわゆる保険調査員で
ございますから。

男の子 (蟬のまねをしながら) ムーシムシムシム
シムシ… (邪魔を続ける)

先生 じゃあ、だんな様がいなくなつてどうされるんです？

先生 (男の子を目でたしなめる)

男 ま、とりあえず明日一杯は待たせていた
だきますが、それでも駄目なら出直します。

男の子 (くじけて椅子へと戻り泣き出す)

先生 どうやって帰るんです？

女の子 (男の子をなだめる)

男 ですから、バスのある時間のうちに街まで行きまして、

その十字路の先を右に曲がった。

先生 ありませんけど。

男 何が？

先生 バス。

男 はい？

先生 お祭り、ご覧になりました？

女の子(男の子につられてぐずりだす)

男 え、でもバスが止まるのは

先生 日暮れからなのは今日までです。明日からは山車が出ますから、バスなんて動きません。

男 …いつまで？

先生 そりゃあ、お祭りが終わるまではずっと。

男 何ですって？

女の子(泣く) ふええ…

男 え？

先生 あれ、どうした？

子どもたち(更に泣く)

男 …ええ？

先生 何で、泣いてるの？

男の子(しゃくりあげながら男を指す) だって…だって…ムシ…ムシ…

先生 あーあ、泣かした。

男 え、これ私のせいなんですか？

先生 ほら、どうにかしないと？

男 先生、これで発電してくださいよ。

先生 いや、無理ですって。

子どもたち(更に泣く)

男 分かった、分かった。じゃあ100円あげるから泣かないで。

子どもたち え？(泣き止む)

先生 え、100円ってあなた

男 世の中、困ったときはお金で解決です。そもそも、保険だってそういうものじゃありませんか。

幸いにして相手はがきんちよだ。100円も握らせておけばどうってことはない。

女の子 100円？

男 そう、100円をあげよう。ただしいいか、これ以上ピーピー泣くようならほんの少しも出し

やしない。

先生 うわ、大人ってこええ。

男の子 2人ともくれる？

男 え？

女の子 100円ずつで…

子どもたち 200円。(再び泣く)

先生 うわ、子どももこええ。

男 分かった。じゃあそれぞれに100円ずつやるから。

女の子(とたんに泣き止んで) よっしゃ。

男の子(とたんに泣き止んで) うっし。

女の子 とった。

男 はあ？

女の子(はずみで足を打つ) あ、いたっ。

その十字路の先を右に曲がった。

先生 あ、じゃあ僕ももらっていいですかね？
男 何ですか？

農夫が麦打ち場へと入ってくる

農夫 おい、ちよつといいか？

男 あ。

農夫 ……どうも。

先生 お邪魔してます。

男の子 なあに？

農夫 外が騒がしい。ちよつと牧場のほうを見てきなさい。

女の子 外？

男の子 っつて、どっち？

男 あの、ちよつとよろしいですか？

農夫 何です？

男 その泥棒のことで、少し…お伺いしたいことがあります、よろしいでしょうか？

先生 あ、お仕事だ。

農夫 いや、それは。

男 お時間は取らせません。いくつか、お聞きしたいことがあるだけなんです。

農夫 ……見回りをしながらでもいいですか？

男 ありがとうございます。

男の子 あの、さ。

男 え？

農夫 何だ？

男の子 (女の子を指して) ……足、痛めてて。

農夫 それが？

女の子 いいよ。

男の子 お祭りだよ。

農夫 ……祭り？

女の子 ……お祭り？

男の子 きつとお祭りの音…街でみんなが騒いでいる音……今日は、花火が上がってないから。

農夫 そんなのが丘まで聞こえるわけないだろう。

男の子 でも、今年は

農夫 そんなことを言つて、また泥棒が入ったら責任が取れるのか？

男の子 でも、

男 あのー、

農夫 あ、では、…じゃあこちらに。

男 すみません。

農夫は男とともに外に出ていく

間

すっかり拗ねた男の子は、女の子の手を握り、外へと連れ出そうと歩き出す

その十字路の先を右に曲がった。

先生 おい。
女の子 え？
男の子 何？
先生 今年つて？
男の子 だから何が？
女の子 今年？
先生 お祭りの音。去年は聞こえなかったの？
男の子 …だって、坂の途中の樹がなくなったから。
女の子 樹？
男の子 ねえ、
先生 なあ。
男の子 もういいでしょ。
女の子 なあに？
先生 適当にサボれよ。
女の子 ……うん。

男の子は女の子の手を引いて、そのまま出ていく
残された先生は、散らかったままの麦打ち場の片づけを始める

先生 大変だね、どこも。

いつの間にか、女がそれを見ている

女 でも自分には行かないのね？
先生 え？
女 冷たい人。
先生 何してるんですか？
女 代わってあげないの？
先生 何が？
女 あの子と…あなた。
先生 ……どうして僕が？
女 ひどい人。
先生 あの保険屋さんですけど。
女 保険？
先生 ええ、スズキさん。
女 ああ、あの。
先生 お話、聞いてあげたらいかがです？
女 ……どうして？
先生 あの人、別に奥さんからお金を巻き上げようとしてるんじゃないみたいですし。
女 え、違うの？
先生 ええ。とにかくお話だけでも聞いて差し上げたら、
女 それは明日でもできることね。
先生 ……ええ。

その十字路の先を右に曲がった。

女 こっち。

先生 …あのね、奥さん、

女 大丈夫。誰にも気づかれてやしないから。

先生 やっぱりまずくないですか？

女 いいから、いらつしやい。

先生 ……はい。

女は先生を連れて母屋へと向かう

少しの間

入れ替わるように少年が麦打ち場へと戻ってくる

少年 バレバレだよ。

少年は煙草に火を点け、ゆっくりと煙らせ出す

少年は煙草を燻らせている
そこに男がせわしない様子で現れ、少年を見て立ち止まる

男 え。

少年 …え？

男 …君は。

少年 ？（自分を指差す）

男 ……ああそうか。あれだ、もうひとりの、

少年 あの、だあれ？

男 いやいや、失礼。私はです、農協からまいりました、

少年 ああ、ああ、聞いてます。

男 え、それはどういう風に？

少年 何か……ひどいみょうちくりんな名前の、

男 スズキです。日本一ありふれた名前の。

少年 泊まったんだっけ、ウチ？

男 ええ、昨日から。

少年 から？

男 バスがなくなっただんでね。それで会社に電話したら、とりあえず調査が済むかバスが動くまで帰ってくるなっけことになっっちゃって…有休扱いで。

少年 煙草。

男 え？

少年 いらぬ？

男 結構。私には自分のがありますから。

少年 あ、そう。

男 そうだ。ちよつと話を聞かせてもらえるかな？

少年 （灰皿を出す）はい、これ。

男 え？

少年 煙草……持つてるんなら吸うでしょ？

男 よろしいかな？

少年 どうぞ。

男 これはどうも。すみません。

少年 調査って何を？

男 泥棒のことは知ってるよね？

少年 捕まえてくれるの？

男 いや、それは私の仕事じゃ。

少年 それじゃ、何が仕事なの？

男 ええ、とね…まず、

少年 調査？

男 って言っても、共済、つまり、保険の調査をするのが私の仕事なのね。

少年 うんうん。

男 例えば今回みたいな盗難だと、被害額とか過失責任とかね…そういうものをいちいち評価して、

その十字路の先を右に曲がった。

その十字路の先を右に曲がった。

少年 え、弁償するだけじゃないの？

男 だからつまり、減価償却とかね、そういうのも色々査定してね…（煙草の箱を取り出す①）

少年 へー。

男 （空の箱を探っている）ま、こちらも損金出すわけにはいかないからね。

少年 例えばどんなの？（煙草の火を消す）

男 えーとね。例えば、こないだあった…なかった（空の箱を捨てる）…これも盗難事件だったんだけど。

少年 うん。

男 （煙草の箱を出す②）シヨベルカーが盗まれたのね？

少年 シヨベルカー…あの、こういうやつ？（手でシヨベルカーを示す）

男 （空の箱を探っている）そう、それ。ただし大分年季も入ってるし、管理もひどくずさん。で、これはとても全額補償するわけにはいかないってことになって、

少年 保険金が減らされた。

男 ー、違う。（空の箱を捨てる）

少年 じゃ、何？

男 お金じゃなくて、現物で補償をすることになった。

少年 ん、中古車ってこと？

男 いや、じゃなくて。

少年 何？

男 シヨベル部分だけをね。

少年 …シヨベ？

男 だから、君がさっきやったこういう…このシヨベル部分。（手でバケツトを示す）

少年 ……大人って大変だ。（次に吸うための煙草を取り出す）

男 （煙草の箱を取り出す③）で、今その泥棒について調べてるんだけど。

少年 なるほど。

男 いいかな？

少年 うん。

男 （空の箱を探っている）あ、まさか見たりはしてないよね、泥棒？

少年 僕らは知らない。

男 被害があったのはいつごろか覚えてる？

少年 えーと、（煙草に火をつける）いつだったけ…このひと月の間だと思うけど。

男 （空の箱を捨てる）泥棒が入ったのは1回だけ？

少年 え、何回も来てるの？

男 いやいや、念のためにね。

少年 あれ、何回だったけ？

男 2回？

少年 どうかな？

男 それとも3回？

少年 分かんない。

男 じゃあ、（煙草の箱を取り出す④）泥棒の話聞いたのは誰から？

少年 何？取り調べみたい。

男 いやいや、だから

少年 念のため？

その十字路の先を右に曲がった。

男 だから。(空の箱を探る)

少年 みんな騒いでたからね…あ、でも栗が一番ピリピリしてるけど。

男 ああ、あの人ね。(空の箱を見て)あれ？

少年 あ、もう聞いている？

男 (空の箱を捨てる)いや、全然要領得なくて。(すべてのポケットを検めだす)

少年 栗は基本的に頭悪いからね。(煙草を取り出す)

男 (煙草を探してバタバタしている)あの人、あれで一応責任者なんですよ、こここの？

少年 責任者はどんな様。栗は、単にここが長いってだけで。

男 いや、そういうことを言い出せば世の中全部だいたいそうなんだけどね。

少年 はい、どうぞ。(煙草を差し出す)

男 …え？

少年 煙草、ないんですしよ？

男 …痛み入ります。

少年 いいえ。

男 あ、そうだ。これ、一番聞きたかったんだけど。(ライターを探してまたバタバタと体を検め

はじめる)

少年 なあに？

男 果たして、何が盗まれているの？

少年 …何？

男 だから、盗まれたものはいったい何で…これが分からないと仕事のしようがないからね。

少年 (ライターを差し出し)はい、こちらどうぞ。

男 ああ、これはこれは重ね重ねね。

少年 ええ、まったく。

男 あれ？

男はライターで火を点けようとするが、ガス欠らしく火は一向に点かない

男 ……点かないな。

少年 じゃ、こつち。

男 え？

少年 どうぞ。

少年は自分が吸っている煙草をくわえたまま差し出す

男は少年の煙草から直接火を移してもらい、吸い始める

少年 じゃ、僕らはこれで。(火を消す)

男 ああ、ありがとう。

少年 いえいえ。

男 あ、ライター。

少年 いらないよ。点かないんだもん、それ。

少年は退出する

その十字路の先を右に曲がった。

男

……そりやそうだ。

男はしばらく煙草をふかしている

男

……僕ら？

女中が男と向かい合っている

女中 おはようございます。昨晚はぐっすりとお眠りになられていたようで、何よりでございます。
男 ええ、おはようございます。私、昨夜はあんまり寝ていませんし、朝というか、もうほとんど
昼なのですが、
女中 すみません。私、本日はお昼からのお勤めでして、
男 いや、知りませんけれど。
女中 しかしですね、芸能の世界では、時間にかかわらず挨拶はみな「おはようございます」と申す
男 …あの、昔、何か
女中 やっていません。
男 はい？
女中 懐かしいですね、昔見たことのある宝塚。2階席からなので人が豆粒のようで、何一つとして
楽しいことはありませんでした。
男 （さわやかに）こんにちは。
女中 お食事はお取りになれましたか？
男 ええ、それがまだでして…ご用意いただけるとありがたいのですが。
女中 それはちよつと…無茶な相談でございます。
男 じゃあどうして聞いたんです？
女中 さあ…。
男 では、せめて水の一杯でもいただけないでしょうか…私、朝方から歩き通しで。
女中 お水でございますね、お安い御用でございます。少々お待ちくださいませー。
女中はそのまま台所へと出て行ってしまふ
少しの間
男は椅子へと向かい、腰掛ける
男 あーあ。
女 女が出てくる
女 あら？
男 あ、これはどうも。
女 昨晚は、よくお休みになりました？
男 いえ、残念ながらそうもまいりませんで。
女 まあ。
男 昨夜から、まあ調査も兼ねて敷地内を色々散歩させていただいたんですが、本当にこちらの
女 お宅は広くって
男 （椅子を指して）こちら、失礼しても？
女 ああ…気がつかずに。
男 それで、何か分かりました？

その十字路の先を右に曲がった。

その十字路の先を右に曲がった。

男 ええ、少し、奥さんにお伺いしたいことがあります。
女 あら、なあに？
男 昨日も少しお聞きはしたんですが、今回の泥棒についてですね…知ってることがあれば教えて
女 いただきましたいんですね。何かご存知じゃありませんか？
男 いえ、
女 ご存知？
男 もなにも、
女 (期待をこめて) 何かを知ってる
男 つてこともないんですけれど。昨日も申し上げましたとおり。

女中がウォーターピッチャーに入れた水を持って出てくる

女中 お待たせいたしました。
男 え？
女中 あら、奥様。
女 どうしました？
男 いえ、私がお水をお願いしたんです。
女 そうでしたか。
女中 そうなんです。さ、お水をどうぞ。(ピッチャーを差し出す)
男 …あの、コップは？
女中 はい？
男 私は水を飲みたいんです。しかし、お水だけではお水はいただけません。お水を飲むための、
女中 コップをいただけませんか？
女 ああ、これは私としたことが…すぐにコップを持ってまいります。

女中はウォーターピッチャーを持ったまま去っていく

女 何の話でしたっけ？
男 ええ、泥棒の話ですね。
女 泥棒。
男 泥棒が入ったのは、いつ頃なんでしょうか？どなたに聞いても、日付がはっきりしなくて。
女 ええ、そんなに前の話じゃありませんけれど。
男 ええ。
女 ただ、日にちまでは…そういうことは主人にすべて任せてありましたから。
男 いや、そこを何とか思い出していただきたいんですが。
女 そう言うことを言われましても。

女中がコップを持って出てくる

女中 お待たせいたしました。
男 え？
女中 先ほどは失礼をいたしました。私、早速、コップを持ってまいりました。
女 コップ？

その十字路の先を右に曲がった。

女中 さ、コップをどうぞ。(コップを差し出す)

男 あの、水は？

女中 はい？

男 私は水を飲みたいんです。しかし、コップだけではお水がありません。だから、お水「も」、
いただけませんか？

女中 ああ、これは私としたことが…すぐに持ってまいります。

女中はコップを持ったまま去っていく

女 …ごめんなさいね。

男 あ、いえ。

女 あの、私がこちらに嫁ぐ前からいらっしやって、機会があれば一度締め上げてアレしたいと
思ってるんですけど、

男 あの、お話の続きなんですが。

女 はい。

男 いったい…このお宅では泥棒に何を盗まれたんです？

女 と、言うこと？

男 例えば農機具なのか、はたまた作物なのか…ご主人が帰ってくるまでに、できる限りの調査は
済ませておきたいんです。

女 しかし、そういうのはすべて主人がやっておりましたから。

男 今日はお帰りになるんでしょうか…バス、全て止まってしまおうようですが。

女 どうでしょう？

男 どうにか連絡をつけてはいただけませんか？

女 いえ、こちらから、となるとちよつと。

男 携帯電話なんかは？

女 主人、あんまりそういうのは好きじゃなくて…必要ありませんし、…ほら、特にこの丘の
上じゃ電波も届きませんし、ここいらはほら、何もない田舎ですから。

男 …そうですか。

女 あ、でもテレビはあります。

男 はい？

女 ラジオもあります。

男 どうしました？

女 車だつて走ってますし、スーパーだつてあるんです。そりゃ、イオンやヨーカドーなんていう
最先端の商業施設はありませんけど。

男 別に私は何も申してはおりません。

女中がお盆を持って出てくる

女中 お待たせいたしました。

男 え？

女中 私、ひらめきました。お水とコップをいっしょに持ってくるために、お盆を持ってきました。
水とコップは？

女中 はい？

男 水とコップをいっしょに持つてくるためのお盆の上に、どうして水もコップもないんです。
女中 ああ、私としたことが。
男 というか、どうして水やコップをいちいち持つて帰るんです。持つてくる度に机に置いてけばいいじゃないですか。

女中 ああ、私としたことが。（お盆を机に置こうとする）
男 お盆を置いちゃいかなんでしょう。水とコップをいっしょに持つてこないといけないんですから。
女中 ああ、私としたことが。
（けたたましく机をけりあげる）
男 うわっ。

女中 奥様？
女 水はもう結構です。お下がりなさい。
男 え？

女中 しかし奥様、まだお水もおコップもお持ちしていません。
男 ええ、それに水を飲みたいのは私なんですが。

女 分かりました。下がりなさい。
女中 ですが奥様、

女 いったん、
女中 え？

女 死んでみますか？
女中 奥様？

男 あの、もうあなた結構ですから…コップと水を台所に置いといていただけますか？…あとで私、勝手にいただきますから。

女中 承知いたしました。
男 ありがとうございます。

女中 ……あの、お盆は？
男 います。

女中 はあ、左様でございますか。

女中は首をひねりながら去っていく

女 えーと…で、何の話でしたかしら？

男 あの、泥棒の話なんですが。
女 なるほど、泥棒。

男 帳簿を、調べさせていただいてもよろしいですか？
女 帳簿？

男 何か分かるかもしれません。先にも申し上げましたが、こちらとしても、ご主人が帰ってくるまで何もしないというわけにはいきませんから。

女 帳簿でよろしいんですね？
男 お願いできますでしょうか？

女 ええ、構いませんけれど。

男の子が客間を覗き込み、女を認めて入ってくる

その十字路の先を右に曲がった。

男の子 あ、奥様。

男 え？

女 あら？

男の子 すみません。ちよつと、お願いがあつて、

女 どうしました？

男の子 あの、湿布をいただけませんか？

男 湿布？

女 またなの？

男の子 はい、まだ足が痛むみたいで。

女 というかあなたたち、今日の作業は？

男の子 あ、さつき終わりました。

女 ……終わり？

男の子 あの、今日はもともと刈り入れの予定だったんです。

女 ええ。

男の子 ただ、だんな様がいませんでしたから…準備までは全部終わって…だから、今日は午前で
終わりました。

女 ……そう。

男の子 あの、

女 湿布だったら母屋の救急箱の中です。場所は分かりますね？

男の子 あの、それと、

女 何です？

男の子 ……足が、

男 足？

男の子 だんだん腫れてきて…できれば、お医者さんに診せたいんです。

女 そういうことはあの人が帰ってきてから相談をなさい。足が痛いんなら、それは作業を休めば
結構なんですから。

男の子 ……分かりました。すみません。

男の子はそのまま去っていく

男 あの、大丈夫なんですか？

女 何が？

男 念のために、医者に診せておいた方が、

女 どうしてあなたがそんなこと言えるんです？

男 何ですって？

女 いえ、仰ることは分かります。けれど、それは主人じゃないと決められないきまりなんです。

男 きまり？

女 ええ。

男 しかし…そのご主人が今はいらつしやらない訳なんですから。

女 でも、ただの怪我じゃありませんか。それで命を落とすわけでもなく、

男 あの、立ち入ったことをお聞きするようですが、よろしいですか？

女 立ち入るのがお宅様のお仕事なんでしょう？

男 こちらでは、どうしてああやって子どもを引き受けてらっしゃるんです？

その十字路の先を右に曲がった。

女 なあに？

女 いえ、立派なことだとは思いますが。しかしほら、こちらのお宅は街から離れた丘の上にはぼつんと。学校だつてありませんし、ああやって先生が来ていただけるとはいえ、あまり、子どもを育てる環境というには、

女 だつて、お金がいただけるんですもの。

女 え？

女 たくさん出ましたでしょう、そういう…身寄りのない子どもたち。それを引き受ければ、毎月決まった額のお金が役所からいただけるんです。

女 …お金。

女 ほら、私もはこういう商売をしていますから、毎月、税金のかからない現金が入るってことは大変助かるんです。もちろん、農作業の人手にだつてなつてくれますし。

女 …それで。

女 ええ、あの子たちのいちいちについては、主人じゃないと決められないことになつていゝんです。

男 刈り入れといつしよ？

女 ええ、そういうきまりなんです。

男 (何度もうなずき)なるほど。

女 帳簿ですね。こちら、ご案内いたします。

暗転

【シーン9】 麦打ち場・夜（3日目）

明転

少年が女の子の足の包帯を交換してあげている

男の子はやはり祭りの様子を眺めている

街の方では冒頭と同様に先生や女、男が夜の遠景（音）をつくっている。

間

男 おおー。

男の子 …祭り。

女の子 ね、今日は行かないの？

少年 え、何？

女の子 だから、

男の子 お祭り…。

少年 …どうだろ？

女 （拍手と笑い声を小さく響かせる）

女の子 これ、何の音だっけ？

男の子 爆竹。

女の子 本当に？

少年 本当だよ。

女 違うよ。（続ける）

男の子 違くない？

少年 だから、

女の子 本当？

少年 （黙って包帯を巻いている）

女 （音を出すのをやめて退出へ向かう）

男の子 花火。

先生 （口笛を吹く）

男 （併せて）おおー。

男の子 花火につられてライオンも鳴いてる。

女の子 熊さんは？

男の子 そもそも、熊の鳴き声ってどんなの？

少年 あ、ピン借りていい？

女の子 あ、うん。（自分の髪から1本抜いて渡す）

少年 ありがとう。（後に、ピンで包帯をとめる）

男の子 クマーン、とか…違うな。

男 （ひどく小さく）クマーン。

少年 よかったね。

女の子 え？

少年 足。刈り入れ、なくなって。

女の子 うん。

男 …今のはひどいな。

男の子 お医者、やっぱりダメだった。

少年 そう。だんな様が帰ってこなくちゃ。でも、仕事は足痛かったら休んでいいって。

その十字路の先を右に曲がった。

その十字路の先を右に曲がった。

女の子 うん。
少年 あー、それは困ったね。
女の子 どうして？
少年 だんな様が帰ってこない間は、刈り入れが始まらないから僕らの仕事はないでしょ？
女の子 うん。
少年 だから今のうちに医者にいきたかったんだけど、だんな様が帰ってくるまでは医者にいけるか
分らない。
男の子 あ、そうか。
女の子 どういうこと？
男の子 パララックスだ。
少年 パラドックスのことかな？
男の子 そうとも言うね。
女の子 何のこと？
少年 はい、とにかくこれで終わり。
女の子 ありがとう。
少年 きつかったりはしない？
女の子 大丈夫。
男の子 ね、足はどう？
女の子 くさくないよ。お風呂入ったもん。
少年 うん、違うね。
女の子 え？
少年 だから、
男の子 まだ痛む？
女の子 大丈夫。湿布もしたし……（自分の足を地面に2度打ちつけ）いたつ。
少年 ああ、もう。
男の子 だめじゃん。
女の子 すぐ治るよ。湿布してるんだから。
少年 湿布？
女の子 湿布はね、何にでも効くんだよ。湿布の
半分は優しさでできてるんだよ。 先生 （入ってくる） そうそう
少年 うん。何か湿布と正露丸とバファリンが 先生 そのまま、こっちまでお願いします。
ぐっちゃぐちゃだ。 男の子 あ、先生だ。
女の子 え？
少年 あ、本当だ。
女の子 先生だ。
先生 おう、足、大丈夫か？
男の子 湿布、もらってきた。
女の子 湿布、してもらった
少年 湿布、してやった。
先生 いいか、今から面白い実験を見せてやる。さあ、そのままどうぞ。
男の子 実験？

頭に妙な装置を付けた農夫が先生の導きで入ってくる

その十字路の先を右に曲がった。

農夫 あ の、私はどうなっているんです？
先生 まあまあ。

女の子 あ、栗。

男の子 頭…。

少年 実験？

先生 じゃあそのまま、こっちを向いてもらえますか？

農夫 こうですか？

先生 そう。そこからゆっくりとこう…ここまで、ここまでゆっくり歩いてきていただけませんか？

農夫 はあ。

男の子 頭が…。

農夫はゆっくりと先生の指示に従い歩く

すると、農夫が通る先々にある電球や家電品が光りだす

先生 (口々に) よし、来た。

女の子 (口々に) うわ、すごい。

男の子 (口々に) え、これ電気？

少年 何してるの？

農夫 あ の、何が起きてるんですか？

先生 発電です。

農夫 え？

少年 何これ？

先生 インバーターです。

少年 その頭が？

農夫 これは何の機械なんですか？

先生 ありがとうございます。とりあえず実験

は成功です。

農夫 実験？

先生 じゃ、すみませんが今度はそのまま後ろ

に下がってもらえますか？

農夫 後ろ？ (後ろへ下がると再び電気がつく)

女の子 あれ、でもコンセントないよ？

少年 本当だ。

先生 (アンテナを指して) ここから無線で飛ばしてる。

農夫 何が飛んでるんです？

先生 大丈夫。人体にそれほど影響はないはず

です。

少年 じゃ、ちよつとはあるの？

農夫 (立ち止まる) あ の、これで良かったんで

しょうか？

先生 やっぱり課題は発電効率と蓄電池か…

ま、安定性は数でカバーするとしても、

少年 (農夫に) 聞いてないよ。

女の子 電気？

男の子 インバーダー

女の子 インバーター？

男の子 電気つくるの。

少年 頭から電気？

男の子 うん。

少年 すげー。テクノロジー。

男の子 すごい。

女の子 ってか、キモい。

男の子 でも、やっぱり1回目ほどのインパクト
はないよね。

女の子 ってゆーか、さっきより暗くない？

その十字路の先を右に曲がった。

農夫 (いきり立って) あの、さっきからいったい何なんです？

農夫が怒ると同時にすべての電球や家電品が煌々と光を放つ

先生・男の子・女の子・少年 おおおー！

農夫 えええ…！

女の子 (口々に) 何これ？

少年 (口々に) すげー。

男の子 (口々に) 怒った。

農夫 電気が、電気が…

先生 駄目です。あんまり怒ると寿命が縮まります。

農夫 はい？

先生 まだ試作機なんです。リミッターかまき

ずに怒りをそのまま電位的に変換して

けですから、怒りすぎると危険です。

農夫 どうなるんですか？

先生 あの、ともかくその装置すぐに外しますから、こちらへお願いします。

先生はそのまま農夫を外へ連れだす

間

少年 えーと、今の何だったの？

男の子 あ、花火終わってる。

女の子 え、うそ？

男の子 ほら、聞こえない。

女の子 え、うそ、聞こえない？ (外を見る)

男の子 うん。聞こえない。

女の子 …えー。

沈黙

男の子は立ち上がり、街のほうを見つめている

少年 ……行ってみたい？

男の子 え？

女の子 何？

少年 お祭り。

男の子 ……祭り。

女の子 ……お祭り。

少年 行ってみたくない？

男の子 駄目だよ、夜に勝手に出歩いちゃ。

少年 昼だよ。

男の子 え？

その十字路の先を右に曲がった。

女の子 昼？
男の子 (外を指して) 夜だよ。
少年 違う。
男の子 何が？
少年 明日のお昼間のこと。
女の子 明日？
少年 奥様にお願ひしてみようか？
女の子 明日、お祭り行けるの？
少年 かも知れない。
男の子 無理だよ。
女の子 やった。
少年 まだわかんないけどね。
女の子 お祭りはじめて。
男の子 だから無理だよ。
少年 それだって分かんないよ。
男の子 何言ってるの？
少年 だんな様が帰ってこない限り、刈り入れは始まらない。だから、それまでは
男の子 僕らの仕事だってない。
少年 さつきそう言ったよ。
男の子 …え？
女の子 言われた。
男の子 お祭り…行けるの？
少年 行きたい？
女の子 …行きたい。
男の子 行ってみたい。
少年 昼間だから花火はないよ。
男の子 でもサーカスはあるんでしょ？
少年 でも鹿はいないよ？
男の子 ぜんぜんOK。
少年 じゃ、先生に頼んどこう。
女の子 先生？
少年 連れてってもらいなよ。
男の子 でも先生、明日もいるの？
少年 だってだんな様、今日はもう戻らないでしょ？
女の子 うん。
少年 だったら明日もいるよ。
女の子 ん、よくわかんない。
男の子 何それ、エロい話？
少年 うん。エロい話。
女の子 じゃ、先生にお願ひしてくる。(立ち上がる)
少年 あ、なら僕らも行くよ。

男がくたびれた様子で書類の束を持って麦打ち場へ入ってくる

男 あのと、何か表で先生と栗さんがケンカしてたんだけど。

男の子 あ、スズキだ。

女の子 スズオだ。

男 ……どうも。

男の子 あれ、何か疲れてる？

男 ええ、おじさんはお疲れですよ。

少年 帳簿は終わったの？

女の子 帳簿？

男 そりゃあ、もう片っ端から全部ね…奥さんは？

男の子 もう母屋。

男 あ、そう。

少年 でも、結構早かったね。

女の子 何が？

男 いや、すごかった。

男の子 何が？

男 帳簿が。

女の子 帳簿って？

男の子 知らん。

男 そもそも農家のつける帳簿なんていいかげんなのが多いんだけどね。ま、大体みんな脱税するための小細工してるからつじつまだって合わないし…中には、春先に稲の苗を買ってんのに、秋には麦を収穫しちゃうとことかあったりするからね。

男の子 マジックだ。

男 ただ、この帳簿はすごくしつかりしている。作付けの品種ごとにきっちり分類もされててね。この仕事してても、あれだけきれいな帳簿はなかなかないよ。いやほんとに、あの帳簿つけてる人は、なかなかの天才だね。

少年 (ガッツポーズをしている)

男 君か？

少年 まあね。

男 天才。

少年 フー。

男 じゃあ、そんな天才を見込んで頼みがある。

少年 何でも聞いて。

男 盗まれたものはいったい何だ？ (持っていた書類を台に投げ出す)

少しの間

少年 ……え？

女の子 なに？

男 おい、そこのがきんちよ。

男の子 は？

男 奥さんと呼んでもらえるかな？

男の子 ガキじゃねーし。

その十字路の先を右に曲がった。

女の子 どうしたの？

男の子 奥様は、

男 母屋だって言うんならここに連れてきてもらえないかな。寝入ってしまうにはまだ早い時間だ。

男の子 やだよ。

男 怒られるんなら私が責任を持とう。

男の子 だから嫌だ。

男 300円あげよう。

男の子 責任取れよ。(母屋へ向かう)

少年 行くんかい？

男 じゃ、よろしく。

男の子 任された。

少年 それって、僕らが必要？

男 えーと、帳簿とか分かってるのは…

少年 (手をあげる)

男 そっちは？

女の子 知らない。

男 じゃ、君だけだ。いいかな？

少年 悪いけど、先生見つけて明日のことお願いしといて。

女の子 分かった。先生どこにいたの？

男 えーと、そっち。栗さんとかみ合いのケンカしてたからすぐ分かる

女の子 外ね。(外へ向かう)

少年 あ、急がなくていいから。

女の子 うん。

女の子は足を引きずりながらそのまま外へ出る

男は投げた束をとって、目当ての書類を探している

少年 それで？

男 君に聞きたいのはそんなに多くはなくて、

少年 なあに？

男 あったあつた…ちよつと前になるんだけど、ここだけ収量が落ち込んでるんだけど、これは…

少年 ああ、それ？

男 病気か何か？

少年 霜を…降ろしちゃって。

男 霜？

少年 だんな様がいなかったから。

男 …だから？

少年 その日に霜が降りるかもしれないってのは分かってたんだけどね。

女が入ってきて、その後、男の子も戻ってくる

女 あの、何です？こんな時間に。

男 お呼び立てをして申し訳ありません。共済のことで少し、

その十字路の先を右に曲がった。

女 主人が戻ってからじゃいけませんの？
男 いつ戻ってくるのかはつきりさせていただければ、応じられない相談ではありませんが。
女 じゃ、明日じゃいけませんの？
男 明日できる話でしたら今、お願いします。
女 分かりました…どうぞおかけください。
男 ありがとうございます。いえ、そんなに
女 時間とはらせません。ごく、簡単なことが
男 ならないから…あ、奥さんもどうぞ。
女 いえ、私は。
男 お座りください。大事な話です。
女 そうではなく。(背の高い椅子を示す)
男 え？
少年 (背の高い椅子をセットして) 奥様専用。
女 そうなんです。
男の子 偉い椅子。
男 あれ…でも今朝方そっちに
女 一人じゃ高くて座れませんから。
少年 (女が座るための介助をする) どうぞ。
女 ありがとうございます。(背の高い椅子へ座る)
男 なるほど。
男の子 偉そうでしょ？
女 それで、お話は？
男 (女を見上げて) 高いな。
女 何か？
男 いえ……では、よろしいでしょうか？
女 どうぞ。
男 まずはつきりとさせておきたいことがあります。私は農協から損害調査のためにまいりました、
女 いわば私は農協の代理人であるということなんです。
男 ……知っています。
女 私ね、昨晩からこちらの農場を歩かせていただきました。…いや、こちらのお宅は本当に広い。
男 歩き回るのに朝までかかってしまいました。
女 ええ、それはお昼間に伺いました。
男 帳簿も調べさせていただきました。実によく整理された良い帳簿だ。
少年 それもさつき聞いたよ。
男 調べてみれば、作付けの計画だつて相当にしっかりされている。少なくとも私が見たここ数年
女 の間には、一度の赤字も出していない。
男 そうなんですか？
女 ご存じありませんでしたか？
男 ええ、そういうのは主人が
女 (さえぎる) でしたら、奥さんが知っているところまで申し上げましょう。さらに慎重でもある。
男 (男の子を指して) このように孤児を引き取って、現金収入と労働力の確保にも余念がない。
男の子 何それ？
男 何しろ、孤児なんて取れた作物でも食わせておけば勝手に育ちますから。

その十字路の先を右に曲がった。

少年 おい。
少年 君だってそうだろう。
男 はあ？

男 これだけのお宅が、まさか保険金を狙って狂言を働くようなまねをするはずがないし、する必要もない。帳簿にもそのような細工をしたあともまったくありませんし、むしろ不自然なほどきれいな帳面づらをしている。

男女 あの、前置きは承知いたしましたから、
男 (かまわず) 一晩歩いてみましたが、このお宅のどこにも荒らされたようなところはありませんし、備品だって、台帳と照らし合わせてみましたが少なくとも倉庫の中に不自然な様子はひとつもなかった。もちろん、奥さんの寢室だけは調べちゃいませんが、

男女 あなたは、何を疑ってらっしゃるんです？
男 (書類を叩きつけて) だから何を盗んでいったんですか、泥棒は？

間

……え？

男 この家から…何も盗まれたものがないんですよ。どこを探しても。どれだけ歩いてても。何ですって？

男女 私、ご主人から盗難の被害にあったとの連絡をいただいてこちらへやってまいりました。

……知っています。

男女 ご主人、いったい何を盗まれたと思っただけでいらしたんでしょうか？

……知りません。

ほら、これだ。

何です？

男女 このお宅のどこかに、ご主人なしに進む物事っていうのは、ひとつでもあるんですか？

ありますよ。

男女 じゃ、明日こそは刈り入れはするんですね？

……それは、

男の子 しないよ。

男女 ええ、しないでしよう。ご主人の不在だけを言い訳にして、もうとっくに収穫できる作物をあなた方はみすみす逃そうとしている。

男女 それと泥棒と何の関係があるんです？

男女 どうだって良いんですよ、本当は…。ご主人のことだって、この家のことだって…。ただ、こと、この泥棒についてはご主人からの申し立て以外にどれ一つ事実を示すものはないんです。

……それは、

男女 私ね…今ではこのお宅に、泥棒なんてそもそも入ってないんじゃないかとさえ思っています。入りましたよ。

どうして？

……だって…主人がそう申していたんです。

男女 (1つの書類を示し) これね、私ども調査員が使う調査票というものです。詳細としてレポートをつけることがほとんどですが、補償額の算定のために必ず記入することが義務付けられている。

……調査票？

男女 ここにはね、今のところ、ご主人の名前と私の名前しか書かれていないんです。

その十字路の先を右に曲がった。

少年 ……つまり、
男 私の報告はこうです。…何一つ、ここで盗まれたものなどなかった。

農夫が息を切らして麦打ち場へと走りこんでくる

農夫 奥様。

女 え？

男の子 栗。

少年 何かあったの？

農夫 今…一番下の畑が荒らされて。

男の子 一番下？

少年 麦畑だ。

女 泥棒？

男 え？

農夫 分かりません。今、先生に見に行ってもらって。

少年 あの、ちよつと見てきます。

男の子 あ、ちよつと待って。

少年と男の子はバタバタと外へ出ていく

農夫 あの…また、ご報告します。

農夫もそれを追って外へ出ていく

沈黙

男 麦泥棒？

女 あの。

男 はい。

女 その、手にされている…調査票、でしたかしら。

男 ……ええ。

女 とりあえず「麦」って書いといていただけます？

男 いや、しかし、

女 あなた、仰いましたよね？

男 私はいわば農協の代理人なんです。

女 私、夫の代理人ですから。

男 ……はい。

女 あ、それと。

男 何でしょう？

女 あなた、今日もここにお泊りになるんですよね、タダで？

男 ……ええ。

女 じゃ、明日の朝ごはん作っていただけます？

男 はい？

女 ついさつき、あの女中クビにしましたから。

その十字路の先を右に曲がった。

男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男

え？

あなただつて、タダ飯を食べて過ごすのは気も引けるでしょうから。

しかし、

何か？

いえ…分かりました。

主人が帰ってくれば、刈り入れも手伝っていただきますから。

え？

保険のお話はその後。…あなた、さつさと保険のお話をしたいんでしょう？

……ええ。

じゃ、私も戻りますから。

あの…あの、畑は？

それを調べるのは、あなたのお仕事じゃありません？（母屋へ向かう）

……ええ…そのとおりです。

女はそのまま母屋へと戻ってしまふ

男も、遅れて麦畑の方へと出て行く

沈黙

音楽

暗転

少年は大きめのカバンを肩に掛けて煙草を燻らせており、女の子が近くに腰掛けている

女の子 ……お祭り。

少年 駄目だよ。

女の子 大丈夫だよ。

少年 だから駄目だって。

女の子 治った。

少年 治ってない。

女の子 もう痛くないもん。

少年 片足ケンケンで100メートル往復できたら信じてあげる。

女の子 ……それ、足痛くないときでも無理だよ。

少年 つまり、今は足が痛いよね？

女の子 あ、しまった。

少年 残念でした。

女の子 ねえ、煙草っておいしいの？

少年 いや……別においしいとかそんなんでもないけど。

女の子 じゃ、楽しい？

少年 そんなハッピーになっちゃう成分は入ってません。

女の子 だったら何で煙草なんか吸うの？

少年 ……それはね、

女の子 それは？

少年 （落ち込む）いろいろあるんだよお。

女の子 ね、ちよつと吸ってみたい。

少年 ……え？

女の子 駄目？

少年 ……（吸っている自分の煙草を示して）これでもいい？

女の子 ありがとう。

少年 一口だけだよ。

女の子 うん。

少年 苦しかったらすぐ吐き出す。

女の子 分かった。

少年は自分の煙草を女の子に一口だけ吸わせてやる

少しの間

女の子（しかめ面で）大人の味だ。

少年 おいしくないでしょ？

女の子 うん、まずい。

少年 はい、じゃあおしまい。

女の子 うええ、まずいです。

その十字路の先を右に曲がった。

少年は煙草の火を消す
男が妙にご機嫌なエプロン姿で入ってくる

男 ご飯、できましたよー。

女の子 え？

少年 何、その格好？

男 エプロンをお借りしました。朝ごはん担当なんで。

女の子 献立は？

男 酢豚とパエリア。

少年 朝から？

男 大切だね、食材の豊かさ、新鮮さ。

女の子 ちよつと、その前に口ゆすいでくる。

男 ん？

少年 ああ、いってらっしゃい。

男 どうかしたの？

少年 あ、ちよつと煙草をね。

男 煙草？

少年 吸わせちゃって…。

女の子 あー、口の中がまずいー。

女の子はそのまま出て行き、気まずい時間が流れる

男 煙草を。

少年 だって、吸いたっていうから…一口だけだよ。

男 君の煙草？

少年 だから、悪かったって。

男 煙草。

少年 …何？

男 六甲の、おいしい煙草。

少年 あ、吸いますか？

男 (気色を上げて) いいんですか？

少年 ええ、何かすぐ欲しそうだったから。

男 すみません。

少年 ああ、いえいえ。

男 あ、朝ごはん。どうぞ先にいただいちゃって、

少年 あ、いや、僕らも吸うんで。

男 そう？

少年 あ、中にライターも入ってるから。

男 これはどうもご親切に。

男が煙草を吸う準備を始める

先生が通りがかりに眠たげな様子で入ってくる

その十字路の先を右に曲がった。

先生 あ、おはようございませう。
男 あ、朝ごはんできてますからどうぞ。(煙草に火をつけて吸いだす)
先生 ああ、どうもすみません。
少年 どうしたの？ 朝帰り？
先生 (立ち止まって) え？
少年 だからバレバレなんだって。
先生 な、何のことかな？
少年 へたくそ。
男 いけませんね、浮気なんて。はい。(煙草の箱を少年に返す)
先生 いや、別に僕は浮気なんて
少年 してるじゃん。(煙草を吸いだす)
先生 あの、それはやむにやまれずに、
少年 あ、今日はよろしくね。
先生 え？
少年 お祭り…ずいぶん楽しみにしてるみたいだから。
先生 …うん、分かった。

女の子が戻ってくる

女の子 先生だ。
先生 おお、朝ごはん？
女の子 うん、今から。
先生 あ、じゃあ一緒に行こうか？
男 あらあら、あんな子にまで食指を伸ばして。
少年 守備範囲が広いわね、スズキの奥様。
男 ええ、本当に。
先生 だから違います。
女の子 何の話？
少年 あ、いいからいいから。
女の子 じゃ、先にいただきます。
男 はい、どうぞおあがりくださいませ。

女の子と先生はそのまま出て行く

少しの間

少年が男の前に灰皿を置く

少年 …どうぞ。
男 ありがとう。

男はしきりにあくびを始める

男 さすがに眠いね。
少年 あの後、ずっと？

その十字路の先を右に曲がった。

男 ええ、調査をしておりました。
少年 ……そう。
男 2日ほとんど寝てないとね…若くはないわ。
少年 何か分かった？
男 (煙草の火を消しながら) うん。…倉庫の奥で、およそ荒らされていた畑で獲れるであろう量の小麦を見つけました。

沈黙

少年も火を消す

男 道理できれいな帳簿をしている訳だ。
少年 ……よく見つけたね。
男 仕事ですから。
少年 それで？
男 いつからないの？
少年 ……何が？
男 君たちの、どんな様？
少年 いるよ、どんな様は。
男 ああ、そうだね。…いるね。
少年 いるよ、どんな様は。
男 一つ…ぜんぜん腑に落ちないんだけど。
少年 なあに？
男 誰が私をここに呼び出したのか、ってことで、
少年 (煙草の箱を差し出して) 一箱どうぞ。
男 ……君か？
少年 出張料。
男 結構です。
少年 そう？
男 昨日の晩、何してたの？
少年 え？
男 君は畑には来なかった…私は、一晩中はりつけにされたけれど。
少年 これ。(バッグを示す)
男 ……何？
少年 秘密だよ。

少年は、男にだけこっそりとバッグの中身を見せる

沈黙

少年 これ、盗難保険で補償できる？
男 ま、申告さえしてもらえればね。
少年 なんかね…来月までなんだって。
男 ん、何が？
少年 (自分を指して) 誕生日だから…過ぎたら、その分の手当はもう貰えないって。

その十字路の先を右に曲がった。

男 ……それで？
少年 ううん、それはただのきつかけ……だって、ほら、色々と無理でしょ。
男 (母屋を見やって) なるほど。
少年 昨日、そういうこと奥様にも言ってたでしょ？
男 飯にでもしようか？
少年 いや、出かけなくちゃ。
男 あ、そうなの？
少年 朝ごはん、せっかく作ってもらったのに残念だけど。
男 でも、黒酢の酢豚だよ？
少年 料理上手か？
男 けれど、パエリアは普通だよ。
少年 あ、やっぱりこれ。(煙草の箱を差し出す)
男 いや、だから、
少年 あげる。もういらないし。
男 (受け取り) あ、確認なんだけど。
少年 なぁに？
男 出てくんだよね？
少年 ……そういうこと聞くな？
男 当てはあるの？
少年 ……うん。お祭りで見つけた。
男 あ、やっぱ君、頭いいわ。
少年 でしょ？
男 君ならきつと、将来は立派な猛獣使いになれる。
少年 いや、別にサーカスじゃないし。
男 (大げさに) ええ、違うの？
少年 それじゃ。(立ち上がる)
男 あ、そうだ。
少年 何？
男 ……(貰った煙草をマイク代わりにして) 初めて……まあ生まれたかどうかは知らないけれども、ここまで大きく育った空の下を離れる決意をされた訳なんですけど、今のご心境は？

少年は差し向けられたマイクに向かって何かを答えようとする

幕

【参考】

『生協の白石さん』白石昌則

『天才バカボン』赤塚不二夫